

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

'87.1
No.66

試 行 錯 誤



カノウ タエ

「ボランティア」の意味を問う

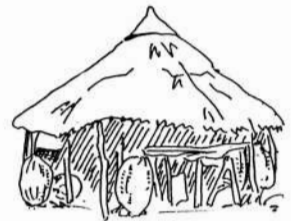
岩 崎 駿 介

昨年の暮れ、JVCの勉強会で南アジアの農村に詳しく、『地域と共同体』や『共同体の経済構造』などの著者である中村尚司氏のお話を聞く機会があった。彼は「ボランティア」の基本的性格を論じ、現代社会が「働く」ということを「商品化」しようとする動きがあること、つまり現代社会においては「働く」ことによって「お金」を得るということが当然のこととなっているわけであるが、ボランティア活動は「商品としての労働力からの離脱」を心掛けるものであり、とりわけJVCのような海外の問題にかかわるボランティア活動は「国境を越える非労働力商品」として位置づけられると提案し、さらに人間と自然の関係やボランティア活動の延長上に何を見るかなどの興味あるお話をしていただいた。

その話をうけてのみな議論はそれなりに紛糾したものであったが、私たちJVCのメンバーはいつもこの「ボランティア」という言葉に悩まされている。「私はボランティアはきらいなんだ」という人がいる。自分の生活をさておいて人を「助ける」などということは欺瞞なのだと言いたいようである。あるいは、「君たちはボランティアなのだから単なる善意の集団であり、物の構造が分からない朴念仁である」とさげすまれることがある。

確かに、われわれが「ボランティア」と名乗るとき、「善意」を前面に押し出すことによって、その対象が置かれている構造的関係を隠蔽してしまう危険性がある。われわれは、たぶん「ボランティア」であることを名実共に乗り越えねばならないのであろう。われわれの活動は、もとより自己救済のための行為であってはならない。問題の真の解決とは、構造や枠組をそのままにして部分的で状況的な改善をはかることではなく、その状況改善をはかろうとする行為の結果生ずる「構造的な変革」の程度に比例して、はじめて解決の道に少し進むことができるのである。

日本国際ボランティア・センターと名乗って活動を続けてきたわれわれが、この「ボランティア」という言葉に内容的な限界をどう乗り越えることができるか。それが今年、1987年にわれわれに課せられた課題である。今年もみな、健康で元気にやりたい。



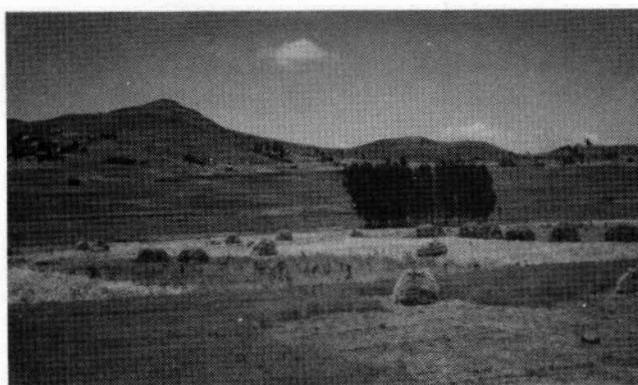
エチオピアの農家

特集 復興に向かうエチオピア

巻頭言 「ボランティア」の意味を問う	2	国際救援の広報担当者もつらいよ!	14
エチオピア復興プロジェクトの1年を終えて	3	南部アフリカの旅Ⅱ ホームランド入国の記	16
エチオピア国・マーシャ村	6	タイ・地域開発 タイ地域開発の目ざすもの	18
栄養教育のこのごろ	8	名古屋での報告会を終えて	19
エチオピア人スタッフの声	10	MY DEAR FRIEND	20
投稿 — エチオピアで体験した半日だけのアフリカ		JVCプロジェクト	24
らしい旅、少女との会話	12	ソマリアの日々 ルークの住人たち	26

エチオピア復興プロジェクトの1年を終えて

JVC事業担当 加納 妙



苗木の種を播く(上)

収穫の終わったマーシャ村(左)

はじめに

エチオピア政府との関係作りに少々手間どったが、“復興”と銘打ったエチオピアでの活動は、昨年4月に始まった。当初、「現エチオピア政府を相手に活動すべきでない」という批判もあれば、「こういう仕事こそ、ただ食糧を送るより大切」と、我々が緊急救援から開発へ一歩踏み出したことへの評価もいただいた。どちらにしろ、引くわけにはいかなかった。すでに一年間、アジバールにおける医療救援を経て、土地の人々とのつながりを持っていたからだ。それまでエチオピア国内で活動していた各国NGOも、同様な復興救援への移行を計画していた。が、結局政府の圧力のため、実施できずにいる団体が多い。我々の活動も、やはり政府との関係や、プロジェクトの内的要因から、当初の計画を変更する部分も出て来ている。以下そのあたりの事情を追ってみたい。

植林計画の変更

まず、この計画は、あまりに木のない現状を目の当りにして、植林を中心に考え起こされたものだった。地球規模を考えても、森林の消失は、生態系の破壊、CO₂増加による気象への影響など、大きな問題をはらんでいるが、我々の活動は、そこまで大上段に構えたものではない。1 NGO として行える植林は、総体としての森ではなく、まずその1本1本の木と対話を始めることだろう。土地の生活の中に具体的に現われてくる問題と木の関係を探り、地道に植林を進め、結果的にそれが生態系回復までつながれば、と考えた。

例えば木がないことで、こんな問題がマーシャでは起っている。マーシャ村内を流れるツルテ川上流は、もともと木でおおわれていた。15年ほど前、木を切ってしまうから、川は洪水をおこすようになった。エチオピアの雨は降ればドシャ降り、木がないために耕作に必要な表土も一挙に流してしまう。また一方で、生活に必要な薪、建材の不足も問題となる。

そうしたことから、我々はツルテ川上流に、まず植林を行う計画をたてた。

しかしこれが初めから問題にぶちあたった。エチオピア政府内の抗争のあおりをくってしまったのだ。JVCは、政府機関である救援復興委員会(RRC)との契約の下に活動しているが、ここと農業省は現在犬猿の仲となっている。そのため農業省はRRCと契約を持ったNGOに非常に非協力的だ。我々にとって不幸な事に、実際土地をおさえているのは農業省であり、彼らはJVC植林予定地に植林を行うことを許可しなかった。理由は、彼らが独自で計画を進めているからというのだが、悲しいことに、当のその地ははげ山のまま放っておかれている。そこで我々は将来的にここの植林に協力できる希望を持ちながら、他の4地区の丘の斜面に植林を始めることにした。計44 ha。ここにも苗木が入手できず、植えることはできなかったが、斜面に段差をつけて土が流れるのを防ぐ、テラシングの作業は6月までに行った。土地の人々による、フードフォーワーク(作業に応じて食糧配布)でというつもりも、食糧が入手できず、かわりに毛布を配ることになった。現在はJVC農場内と、植林サイト近くに苗床が作られ、

ユーカリ、ヒノキ、アカシア等の苗作りを進めている。しかし、まだ先の44 haに植林できるかどうか余談を許さない。農業省が難色を示しているためだ。

この間に調査段階では明らかでなかったいくつかの問題が出てきた。最初に予定していた植林地は、実は細かく分けられ、土地の人々が放牧地として利用している。従って囲い込んで植林すると、彼らの行き場が問題となる。JVC植林地は、村有林とするように考えているのだが、それでも村自身の管理林とならず、政府がおさえてしまう可能性も強い。そこで我々の計画も、村有林から、家の周りに木を植えるというファミリー・フォレストの奨励とそのため苗木配布、農地の中に木を植えていくアグロフォレストリー等に、重点を移しつつある。もちろん水源地での植林の可能性も探り続けている。

種子銀行とアグロフォレストリー

一方農業に関しては、種子銀行と、アグロフォレストリー農場が中心となっている。種子銀行は、当初の計画に含まれていなかったものだが、村人の要請にもとづいて5月より発足した。つまり雨は降っても播く種や農具を持たぬ人が多い、というのだ。運営のための委員会が、村人32人、JVCのエチオピア人スタッフ1人、農業技術者の伊藤さんが顧問という構成で発足した。大雨季播種用の大麦・小麦等60トン以上を計3500人に貸し出した。

なぜ貸すのか…あげてしまう方が手間もかからずやさしいのだが、それではいつまでたっても受身から脱することができない。銀行という形で将来村自身の手で自主運営できることに期待をかけたわけだ。しかし6月の配布後行われた追跡調査では、播かれずに食べたり、売られたケースもかなり報告されている。彼らは食用、種用と同じものを使っているのだから、食べてしまう事を一概に悪いとも言えないが、播かなかった理由としては、外から入ってきた種を信用できない、配られた時期が遅かった、などが上っていた。次の雨季にはこのような反省をふまえ、改良策を検討している。土地で収穫を多く得た農民から種と小麦を交換してもらって種を得る。時期を早める、等。

また、運営を村人の手にという、聞こえは良いのだが、そのことによる弊害も当然起きてくる。例えば借りられる人の選択。委員会はとりあえず各地区長が中心となっているが、その人との仲の良し悪

しがやはり響いているようだ。かといって我々が選択を牛耳ってしまうと、彼らの自主性に期待し委員会を持った意味がなくなってしまうし、我々の方が正しい選び方ができると思うこと自体もおごりに思える。期待を持って、待ち続ける忍耐が必要だ。ただ我々の側も、共に考えていく姿勢で、フォローアップに十分留意していくべきだろう。

実験農場の方では、種子銀行で配られたものを土地の農法そのまま育てている。まず相手を知れた。だが、播く時期が悪く、豪雨の影響をもろに受けたためか育ちはよくないようだ。一方先に触れたアグロフォレストリーに適した樹種を見つけるため、試験中である。

来年度には、有機農業やアグロフォレストリーの内容を含んだ農業教室を、周辺の農民の人たちに行ったり、マーシャ小学校の農業の授業にも協力することになっている。またモデル農場をいくつかに区切って周辺農村の人たちにまかせ、それぞれの方法を比べ合う、という計画も持っている。

数々の困難を乗り越えて

マーシャ村周辺の保健・栄養調査を重ねた後、10月より栄養教室を始めた。週2回、1コース3カ月。村周辺の10人の母親たちがレギュラーメンバーである。週1回は料理教室、野菜を使った料理を紹介したり、お母さんたちから習ったり、隔週毎に授業と、家庭菜園の実習授業を交互に行っている。授業を担当しているのは、主にエチオピア人スタッフだ。初め調理係りとしてやって来たエシャットも、いつの間にか料理教室を担当してがんばっている。なかなかワキアイアイとして良い雰囲気のようなのだが、ここでもいくつかの問題が出ている。種子銀行にも共通した問題だが、人を集めることの困難、土地の人々のJVCへの期待と我々の指向とのずれである。

人を集めることについては、初めの何回かについてはもの珍らしさからぞろぞろやって来たのだが、これは続かなかった。彼らにとって勉強するということは、識字教室の例を見てもわかるように、欠かせば罰せられる義務なのだ。直接的メリット、デメリットが見えないと、進んで集まることはない。一方我々はなるべく不用なものを持ち込まない姿勢を貫こうとしているが、彼らはどうしても期待する。米国の団体が30 km離れた村に拠点をもち、いまだにあれこれ物を配っている、ということもある。物を持ち込まざるを得ない緊急援助の後をうけてはじ

まっている、という問題もある。種子銀行の方でも次の収穫からどれぐらい本当に返されてくるものか…これから相方の思惑のぶつかり合いの中で、我々も正念場に立たされていくことになりそうだ。逃げないことが大切だろう。

12月には、JVCが資金を出し、RRCの井戸掘りチームによる深井戸掘りも始まった。マーシャ村には2基掘ることになっている。

こうして、活動内外に様々な問題を抱えながらも

“緑”を軸としたこのプロジェクトはようやく本格的に歩きはじめています。何より幸いなのは、活動メンバーがほとんど病気もせず、村の生活に混じってそれを楽しんでいることだ。日本側でのバックアップは十分と言えないが、一時帰国時など、なるべくいろいろな場で報告するよう考えている。皆様にもぜひこういった機会を作っていくことや、資金作りへの協力といった形で、一緒にこのエチオピアの活動を見守り、支えていただけたらと思う。

・・・エチオピア・・・

面積：122万1900 km²

人口：3390.8万人（1985）

住民：ハム系（ガラ族）、セム系、ニグロ系等

宗教：エチオピア正教（コプト教）、イスラム教

言語：100種以上。公用語はアムハラ語

<歴史>

エチオピアは、アフリカの中で、エジプトと並んで最古の国家の歴史を誇っている。紀元前100年までにアラビア半島南部から渡ってきた人々が、アクスム王国を形成し、6世紀には、大帝国となった。10世紀にアクスム王国が滅んだ後は小国が分立し、その時代が長く続いた。

1936年一時イタリアの植民地になったが、41年にはこれを脱し、52年、エチオピア・エリトリア連邦が成立した。しかし62年、エリトリアを併合し、エリトリアはエチオピアの一部となった。1974年ハイレセラシエ皇帝の封建的支配に反対する急進改革派が動き出し、皇帝を逮捕した。同年12月、社会主義を宣言。軍部内部の分裂を繰り返しながら、1977年12月メンギスツが議長に就任し、独裁体制を固め現在に至る。

<自然>

最高4260mから最低116mに至る高度の変化があるエチオピアでは、局地的な気候の差も大きい。これだけの高度差に相当する気温の差は、50度近くにも及ぶ。したがって、気温と降水量に変化が大きく、植物の状態も多様性に富んでいる。だが人間の居住が早くから始まり、また、かつては文

明の中心となっていたほど人間の活動が活発であったので、自然のままの景観は多くはない。19世紀末にメネリック二世皇帝によって成長の早いユーカリが導入されて以来、この木が在来種に代わり高原のいたる所で見られるようになった。

<生活>

1984年から5年にかけて、エチオピアはひどい干ばつに襲われた。干ばつはその4年ほど前に始まり、84年はことにひどかった。エチオピア国土の3分の2が、海拔1500mから4000mの高原地帯、平地は紅海沿岸の砂漠地帯だけである。農地は国土のわずか15%だが全就業人口の80%が農民であり、遊牧民と合わせると、全人口のほとんどを占める。6月から9月の雨期を利用して、農民たちは主食のテフ、モロコシ、大麦、小麦、コーヒーなどを作る。粟に似た穀物テフは、エチオピアが起源ともいわれ、ケニア、南アフリカ、オーストラリアにもあるが、人間の食料とされているのは、エチオピアだけである。食料としての価値は、単位面積あたりの人口収容力という点からはかならずしも理想的ではないが、各種鉱物の含有量は麦などと比べて、圧倒的に多く、きわめて健康的なものである。

歴史も古く、西洋の影響を受けることの少なかったエチオピアでは、文化にも独特なものがある。エチオピアの暦では1カ月は30日で、余った5日が13月となる。また1日は午前6時に始まり、午前7時は“朝の1時”という。お正月は9月11日で、ちなみに今年（1979年）である。

エチオピア国・マーシャ村

農業技術者 伊藤幸子

昨年1月からエチオピアで農業指導を行っている伊藤さん夫妻が11月に一時帰国しました。幸子さんはいつもユーモラスな“マーシャ村通信”を寄せてくれています。今回はその現場であるマーシャ村の背景についてレポートしてもらいました。伊藤さん夫妻にとってエチオピアは「天国だ」そうです。

緑色の輪

アフリカと言えば、乾燥した平原、砂漠と遊牧民というイメージがありますが、ここエチオピアは、紅海に面した砂漠を除けば他は2000m、3000mの高地で、サバンナの風景とはずいぶん違います。その山々もカリフォルニアのグランドキャニオンのようで、テーブル台地のあちこちに深い割れめが入っています。

私たちが真冬の日本を離れてアジスアベバに到着したのは、ちょうど乾季のまっただ中で、飛行機から見えた風景は乾ききった茶色の世界でした。その茶色のあちこちに緑色の輪が散らばっているのですが、これがなんと家を囲むかきねの緑だったので。あっちこちに丸やら四角やらの緑と、その中の草ぶき泥壁の家を目にした時、本当にアジアと違うアフリカの世界に来たことを実感しました。

それでも首都アジスアベバは、ユーカリの樹々に囲まれた街でした。もちろん東京、バンコク、ナイロビという大都会を通過してくると、なんとも小さな暗い感じのする街ですが、それでもビルが建ち車がいきかい、道を歩く人々もきれいな服をまとっています。特に私たちが入っているマーシャ村からこのアジスアベバに久しぶりにもどってくると、それはもうここは大都会として輝いて見えます。スーパーに物がある、道路は舗装されている、夜など家々から明るい光がもれてくる。もちろん電気・水道・テレビ・電話はありますし、大学・ホテル・銀行・レストランと整っています。先進国と言われる国々の都会とここでは物の豊かさという点では大差がありますが、それよりも同じ国の中での都市と農村との差の方が大きいと思われるほど。まるで国が違うのではないかと思われるほど、生活のあり方、物のあり方が違います。

エチオピアの風土

エチオピア。地図で見るとアフリカの東端、赤道よりもほんの少し北にあって、スーダン・ケニア・ソマリア・ジブチの国々に囲まれ、東側だけは紅海に面しています。日本の3倍以上の国土に約3400万人が暮らしています。それも、ある民族は高地に、ある民族は低地にと異なった民族が異なった生活様式で生活しているのです。たとえば、2000m、3000mの高地に住む人々には、クリスチャンが多く、標高が高いだけに大麦・小麦・豆類そしてエチオピアの人々が主食としているインジェラのためのテフという穀物など日本で言えば冬作物にあたる物を作っています。それより低い所では、トウモロコシ、ソルガムそして熱帯で見られるバナナ、パパイヤ、マンゴーといった果物が栽培されています。そして国の東南部、紅海・ソマリアに面した所は、砂漠又は乾燥した草原地帯で、ここに住む人々には回教徒が多くいます。暑いという言葉以上の厳しい気候の中で暮らしていますから、どちらかという涼しい高地に住む人々とは、服も家も家畜も違うのは当然でしょう。エチオピアには、このように異なった民族、宗教、言葉、生活様式があります。

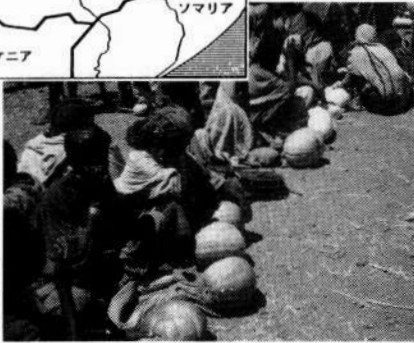
マーシャ村

私たちが入って仕事をし、暮らしているマーシャ村というのは、2800mの高地にあります。エチオピアには14の州がありますが、この村は、北部チグレ州とアジスアベバのあるショア州にはさまれたウォロ州という州の中にあるごく普通のアムハラ族の典型的な農村です。アジスアベバからは北に550km。途中車で一泊しないと入れません。昨年一年間、JVCが緊急医療プロジェクトを行ったアジバールの村からさらに30kmほど奥へ入った村です。2800mのテーブル台地のすみにあるので、2時間も歩けば断崖絶壁、又逆に南の方へ歩けば4000m以上の山があるような地形です。

行政的には、マーシャ協同組合というのがあって、それは、9つの農民組合から成りたっています。私たちのプロジェクトは、このうち4つの農民組合に、種子銀行は9つ全部の農民組合(人口約1万4000人)



市場に並んだかぼちゃ



を対象に行っています。

このような協同組合がいくつか集まってマクデラ郡を作り、他の2つの郡と合わせてワレヒメノ県になります。ウォロ州には、このような県が13あります。

このマーシャ協同組合の中心となるところが、人口約1000人ほどのマーシャ村で、この協同組合の倉庫や事務所はもちろん、小学校、農業普及所、診療所などの公共的な建物があります。

この地域の小学校への就学率は10%。6年間を学び終える生徒は、さらにその半分ということです。診療所では専門の教育を受けた2名のヘルスアシスタントが、村民の診療、治療、保健衛生の指導にあたっています。ライ病患者に対して定期的に薬の配布もしています。

週一回月曜日には、マーシャ村はずれの丘で大きな市が開かれ、各自自分で作った穀物・作物あるいは土器など持ち寄り売買しています。この市は、この地方でも、大きな市で、遠い人は低地から山の上から2時間も3時間もかけてやってきます。マーシャ村以外のほとんどの農民は、山すそなどに点々と散らばって暮らしていますので、市にはもちろん公共のサービスを受けるためには、かなりの時間歩かなければなりません。病人などは、木で作った即席のタンカにくくりつけられて、運びこまれることもしばしばです。

財産は家畜だけ

さて農民の生活ですが、草ぶきやトタンぶきの丸

や四角の家に、半分は牛・馬・羊などの家畜が住み、あとの半分を農민家族が使っています。たき火を囲んで食事を作り、食べ、しゃべり、寝る生活です。物と言えば泥で作った穀物を貯蔵する大きな入れ物・なべ・かめの類、毛布も朝晩の冷えこみにもかかわらず一家族一枚あるかないか。服の着がえもどこにあるのか、本当に財産と呼べる物が家畜しかないのです。家畜さえ持っていない人もいます。日本の生活では、いったい一人の人間がどれだけの“物”を持って暮らしているのか。数えられないほどの“物”の中でしか暮らしていけない私たちにとって、途上国の農村の人々の暮らし方を目のあたりに見ると、どんな暮らし方が幸せなのか考えさせられてしまいます。

緑の世界と茶色の世界と

さて気候はどうかと言いますと、赤道近くにありながら、高地のために朝晩かなり冷えこみます。寒い時など、吐く息が白く見えることもあります。日中は22~23°Cぐらゐまで上がり半そでが気持ちいいほどです。それが一年中続きます。季節は、2月3月の小雨季、6月から9月までの大雨季、10月以降の乾季とわかれていて、農民はその降る雨にあわせて小雨季作、大雨季作と種子を播きます。雨季の間は、作物の緑・草の緑、それこそはげ山も緑になってとても美しいのですが、乾季になってしまうとどの草も茶色に枯れ、木もほとんどありませんから、家のまわりの垣根と少し植えられているユーカリの木の緑を残して茶色の世界になってしまいます。川の水も雨季の間は、山はだをけずり、土砂をおし流す不気味な流れですが、乾季になれば流れているのかいないのか、おとなしくなってしまいます。畑の土も水を得れば泥沼と化し、いったん乾けば、すぐさまひび割れをおこし、固い土になってしまうのです。

雨の多い日本を含めたアジアという世界は、緑が豊かで、そこから得る恵み、食料としても、資源としても、はかりしれない量だと思います。それをうまく利用もしなければ管理もできずに、荒らしてしまったり、こわしてしまったりしているのが今の状態だと思います。日本で農業・林業が成りたないというのは、どういうことでしょうか。途上国で飢えに苦しむのが、農民であるというのはどういうことでしょうか。そんな事を考えさせられるエチオピアでの生活です。

栄養教育のこのごろ

看護婦 内藤のぞみ

クッキングスクール

楽しみな土曜日

5回目を終わったクッキング・スクールです。毎回、次は何を使って何を作ろうかというところで、「あれを入れたらおいしくない」「これは使ったことがない」とエシャット、フカドウ、トーマスたちともめるので、土曜日の昼前に前もって試めすことになっています。

私が一品、エシャットが一品作って競い合います。残りは外で匂いを嗅いで待っていたワーカーたちが食べ、感想を聞いて無理やり「のぞみの方がおいしい」と言わせたり、なかなか良い土曜日です。

マーシャの村人の得意な料理は、にんにくと玉ねぎのみじん切りを炊め、バルバリ（何種類かの香料を調合したものを）を加え、水を加えて豆の粉（きな粉）を入れて煮て終わり。エシャットのはこれにニンジン、ジャガイモ、ショウガを入れます。私のは、さらにふだん草も入れちゃえ、と何でも入れるごった煮。しかしエシャットにしてみれば、シュローワット（豆の粉シチュー）に葉っぱはおいしくない。味覚の違いか、定義の違いか、あまり一致したことはありません。そこがおもしろいところなのですが。トーマスやフカドウも各々の家庭の味や作り方があってよくぶつかるので、土曜日は3つの鍋を作ってみようという時もあります。

日本の野菜の煮込みなどはいろいろな野菜が使え、たくさんの野菜を摂ることができるのでよい方法だと思おうのですが、エシャットにいわせると「一つ一つの味が生かされていない」と。なかなか正統派なのです。さすがコックさん。

調理上の注意

クッキング・スクールで紹介する食べ物で気をつけなければいけないことは、彼らの家の台所用品（ピンとこないな）と薪（糞も）の量と油の量、手間、そしてインジェラと食べておいしいかです。あまりスープがやわらかいとインジェラが崩れてしまうので手でつかめません。スプーンはないし、スープ皿、お椀はないし……。

普通の家では一度に2つの鍋は使いません。一品を3～4日、さらには1週間食べているとのことですよ。

油は他のNGOから配布されたものがマーケットに出回っていたのですが、先日ついに配布をやめたので急に高くなりました。バターは自分の家で作っているところは多いのですが、これは売ってお金を得るためですから自分の家でバターを使っているところは限られています。ですからたくさんの油を使っている料理はあまり勧められません。薪と家畜の糞も大切なものですから長時間の煮炊きはだめです。

また、同じものを2～3日暖めて食べるので、煮こんでまずくなるものはだめです。女たちは食事を作る以外に、麦を粉にしたり、地酒を作ったり、川へ水を汲みに行ったり、畑仕事をしたりとなかなか忙しいのです。それでこれ以上の仕事は……ということが多いため、いかに手間をかけないかを考えなくてははいけません。

この上にさらにバランスのよい食事を、と考えると作るものが限られてきます。中国・韓国、タイのあのバラエティな食事。——何でも使って、何でもおいしくしてしまう……。この国と比べるとため息ばかりです。

「なに、日本人は魚を食べる？ワハハ……」と村のおじさん。

「なんだこのヘビのようなものは、魚？貝？食べたことがない。気持ち悪い」とJVCのワーカー。JVCのワーカーでさえも日本の魚貝類を見て（写真で）ゾットしています。こんな気味の悪いものを食べるのなら死んだ方がましだとも。

食に関しては非常に保守的な人々です。道のりは長い長い。

物々交換するものもない所で

今、週に一回エシャットが出張コックさんをしています。マーケットや道で会った人と約束して家を訪ね、そこに家庭菜園があれば、それを使っている料理を紹介しています。これがなかなかの好評のようです。御主人の方がとても喜んでくれて、「こういうものを妻は作ってくれなかった。今度から作っても

らおう」と。しかし妻たちはたいい「主人が野菜を買うお金をくれない」というのです。

マーシャのマーケットでは物々交換がまだ残っているのです。こういう人には自分の畑の麦と野菜を交換してもらったらというのですが、中には畑のない人もいます。

ナイ、ナイ、何も無い。だから洋服をくれ、毛布をくれと訴えてきます。

「JVCの畑のニンジンがほしいよ」

「火曜日のクッキング・スクールにいらっしやいよ。そうしたら食べられるわよ」

「イシッ」(わかったよ)

このごろは最後にスクールに逃げるケースが多いようです。人々はあまりにも無償でもらうことに慣れてしまっています。スクールに行っても何ももらえないんじゃない行かない、というような人が多いようです。一時たくさんいたお母さんや子供たちの数が減ったのはこのあたりの理由でしょう。

まあ、ゆっくりやって行きましょう。戦略を練って。



今日のメニューはサヤエンドウとニンジンの煮込み

ワーカーの教室

うがいの実演から

木曜日の午後3～4時までJVCのデイリー・ワーカーを道路に面した日陰に集めて、フカドウ、トーマス、エシャットが衛生教育を行ってま。フカドウに言わせると、この国では妻が判断して行動できる範囲が限られているため、夫に教育を与えるのはとても必要なことだということです。

絵や人を使つての実演で、わかりやすく楽しくやっています。たとえば出血した時の手当の仕方、高い熱を出した時の手当、下痢、咳、頭痛の手当てなど実際に必要なものを選んでみます。咳のところでは林氏がうがいをしてみせ、笑わせました。マーシャの人々はこれを知りません。一人の

ワーカーが試めしたところ、飲みこみそうになり吐き出しました。ソロモンでさえ去年JVCで習ったそうです。

何人かのワーカーから質問が出ます。マラリアが下痢の原因として出てきたのですが、「エッ、マラリアは人からショックを与えられた時になるんじゃないのか」。これには少々あわてました。もう一人の農民は「夜寝てマラリアの夢を見るとかかるのではないのか」

薬をくれ

まあここでの教育が大変なことがわかりました。傷が痛んでうなっている人を、火の側に連れて行って煙をあおるのです。膿んでいる傷の上にビニールを被せてしまいます。あるいは傷を履っている布を水に浸してしまったり。

とても目の病気が多いのですが、「きれいな水で洗いなさい」といっても笑われるだけ。薬だけが有効だと信じています。母親の顔はきれいなのですが、それに比べ子供たちの汚ないこと。なぜなら母親はきれいにしていないと夫に逃げられるからだそうです。

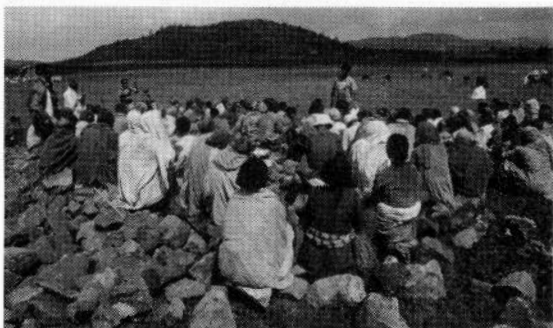
何やらわからない皮膚の病気も多いのですが、これも洗わないで薬をほしがるだけ。

「こんなの見たことないからわからないよ。一つの薬が全部に効くわけじゃないし」。薬だけ入ってきて、知識は入ってきていないのです。古い、古い傷を見せて治してくれと来る人もいます。「私は神様じゃないんだ」

さて現在3回クラスが終っているのですが、相変わらず汚ない布で傷を履っていたり、ビニールをその上に巻きつけたり。水路で傷を洗ったり、消毒だけして包帯をしないと、包帯をしてくれ、薬をくれと、同じことの繰り返しの毎日です。石けんときれいな水で洗えばまず治るんだ(彼らは我々と違い、強力な免疫を持っている人が多い)といっても、薬、薬と言ってきます。

また私のところでは外傷だけに留め、内部疾患はマーシャのクリニックへと言っているのですが、それでも外国人の薬はいいと言って、腹痛や頭痛を訴えてきます。マーシャの小さな店でも数種類の薬が安価で売られており、誰でも手に入れられるという恐しさ。これでも外国人の薬がもてるとは。ただだからかしらん。

石の上にも3年、がんばるより仕方ありませんね。



JVCにはアジスアベバに3人、マーシャ村に9人の現地人スタッフがいる。その中のソロモンとイエットベルグがT/Eに手紙を寄せてくれた。ソロモンは農民とJVCの窓口となっているので、農民とのかわりが深い。イエットベルグは現場の責任者として、政府機関から農民まで含む交渉にあたっている。

《どのようにしてJVCのプロジェクトに参加したのですか》

Sまず最初の質問に答えるにあたって述べておきたいことがあります。私はショア州で育ちましたが、アレルギー体質のためウォロ州には行ったことはありませんでした。私は公立学校の教師をしていましたがそれはひどく苦痛でした。良い気候を求めてここへ来ました。もっとも一番の理由というのは弟を見つけて彼と数カ月過ごすことでした。

私の体調も良くなってから私は弟に迷惑をかけたくなかったので元の場所に戻りました。そこで仕事をみつけるのは本当に難しいのですが、どうにかして探そうと思っていました。1月の終わりに、1人の友人が2つの外国の組織がそこから約70kmのところにあるアジバールに來たことを教えてくれました。アジバールは私のいた町と違う郡ですが、同じ県の中にあります。

すぐに私はアジバールへ行って就職を申し込み、何か仕事がないかと一生懸命になりました。とうとう私は試験に合格し、補助的な仕事のワーカーとしてJVCの仕事にかかわることになりました。

仕事を得て、全体の状況を把握してみてその仕事がとても興味深いものだと思われるようになりました。外国人が困っている人々を助けるのを見るにつけ、仕事への意欲がかきたえられるのでした。

Yこの質問に答える前に私の経歴を紹介します。

私は1974年からエチオピア赤十字協会ウォロ支部で、州のエマージェンシー・コーディネーターとし

エチオピア人スタッフの声 JVCのプロジェクトに参加して

ソロモン フェイサ (S)

イエットベルグ ワルデ アルゲイ (Y)

て働いていました。しばらくそこで働いてから、私はかなりよい条件で転勤を命ぜられました。しかし本部とはうまくいかず、結局その仕事をやめざるを得なくなりました。私はアジスアベバで仕事をみつけることにし、そこで教育を引続き受けることができました。

しかし1984年の干ばつが発生したので、家族を養うために仕事を探すことになりました。私は結婚しており、父と3人の子供がいました。

多くの救援団体が来ていました。私はウォロ州のRRCのオフィスに行き、どこかの組織に雇われる機会はないかと尋ねました。幸いにもドクター林がJVCの下で働ける人間を探しているという情報を得、さっそく1985年2月11日に応募したところ翌日から働くようにいわれました。私はJVCが医療活動を行っているアジバールに赴任しました。

《エチオピアでの農業復興についてどう思いますか》

S私たちは農業と工業の開発をしていかなければならないと信じています。約90%のエチオピアの人々は農業をしています。この数字を見てもわかるように、昔ながらの農法を行っているにしても、農耕は高いパーセンテージを占めています。

実際、ほとんどの農家は自然に頼っており、その自然というのは常に同じ状態であるわけではありません。そのため私たちエチオピア人は突然の大災害に会うのです。

干ばつによる災害はひんばんにあります。現状としては干ばつの被害を受けているのは私たちの国だけではありません。各地での被災者たちは、災害の中で生き抜いていく時もありますが、命を失ってしまうこともあるのです。それにもかかわらず、私たちは自分たちですべての飢えている人々に援助の手をさしのべることはできません。故に私たちは、国際的な援助や資金を必要とする状態に追いこまれています。被災者たちが無気力になっている時、その

資金は彼らの苦しみを柔らげてくれます。いろいろな形、いろいろな場所で国際援助は行われています。私たちはそれらの国際援助の恩恵を非常に受けているのです。

国連やNGOの食糧や医療援助は、あらかじめ決められた期間内に最もひどい地域で緊急に行われなければなりません。そのような救援プログラムを促すことになるでしょう。

現在自然環境は良い状態にあります。さて明日はどうなるでしょうか。これからは基本的環境の解明に力を注がなければなりません。天然資源や自然の豊かさは基本的環境です。私たちの持っている天然資源は日増しにいろいろな手段によって破壊されています。次の干ばつを防ぐために破壊されることさえあります。

土地の復興はかなりの効果をあげ、それによって自然も回復してきました。私たちは長期にわたってこの国の天然資源を開発することができます。その天然資源とは、鉱物資源であり、発達の可能性のある水力資源であり、生産性をあげることでできる土壌などです。しかし私たちは自分たちだけで今述べた資源の開発はできません。私たちには技術も資金もありません。私たちには外国の力、国連やNGOなどの先進国の助けが必要です。国際的な復興、開発計画を通して種々の問題は解決できると思っています。

Yエチオピアでは人口の90%以上の人々が農業に携っていることはよく知られています。つまりこの国の経済は長年にわたって農業に依存してきたといえます。そしてこの数年間土地に対する十分な考慮なしに農業が行われてきたため、現在エチオピアは大変な干ばつに見舞われています。

とりわけ北部は以下の理由のためひどい状態です。第1に数世紀にもわたり耕作され続けてきたこと。第2にこれらの地域は山がちであること。第3にさまざまな理由で森林が破壊されたこと。第4に土壌浸食が年々進み、土地が不毛になってしまったことなどです。北部の土地は完全な開発計画を迫られるほどにやせているのです。つまり土壌浸食から土地を守ったり、農業生産をあげるためには以下のような気配りが必要です。

- (1) 水と土壌の保全
- (2) 植林

これらは必ずや土地の再生に大いに役立つと思わ

れますが、そのためにも長い目で見た適切な農民への指導が必要であると思われます。

《JVCのマーシャ村での総合的復興プロジェクトについてはどのように考えていますか》

Sとりあえず私が述べられることは、今ウォロ州でのNGOのプロジェクトはJVCのものだけです。JVCは2年間のプログラムとしてマーシャ村で援助協力していますが、このプログラムを長期のものに拡張していくことが必要です。

このプロジェクトの主な活動はアグロフォレストリー、農耕促進、栄養教育などに及んでいます。これによって農家の人々の技術も向上し、収穫も増えていくことでしょう。井戸掘りや病院補修も将来の計画に含まれています。

私たちは解決していかなければならない問題をいくつか抱えています。もしJVCがそれらの問題を解決しようとするのなら、その仕事はうまくいくでしょう。

Y1984年に起こった干ばつのためJVCはヘルス・センターを開きました。ヘルス・センターとは干ばつによる被災民のためにアジバールという町にできた病院です。一年後状況が改善されたのでJVCはこのプロジェクトを閉じ、開発に関わる計画をたてました。

この開発プログラムは干ばつの発生原因の調査が行われたあと、RRCとの契約に基づいて1986年3月からマーシャ村周辺で始められました。今まで説明したとおり森林伐採と遅れた農法が干ばつの原因だったので、(i)いろいろな所での植林プログラム(ii)疲弊化していく土地を守り、収穫の向上をもたらすための新しい技術や農法の教育等を行っています。

この新しいJVCのプロジェクトはこの8カ月間マーシャ村周辺で行われ、多くの仕事をこなしました。長期にわたってこのプロジェクトを成功に導き農民たちを援助していくには、十分な物資と技術者が必要です。しかしこれまで外国人スタッフについても現地人スタッフについても人材が不足しています。私はプロジェクトの最も大きな力となる農業の経験豊富な人材が派遣されることを提案します。

(JVCも大ぜいの技術者を現場に派遣したいのですが、エチオピアで働くNGOのビザわくが決められているので、イエットベルグの提案の実現は不可能です)

エチオピアで体験した半日だけのアフリカらしい旅

写真家 児島盛之

サバンナの中を、車は2時間以上走り続けていた。茶色に乾いた大地も、点在しているアフリカアカシアの樹々も、車が巻き上げる砂埃も闇に包まれてしまい、視界は車のヘッドライトが照らし出す前方数十メートルだけになってしまった。

西の空に異様なほどオレンジ色に染まった雲を見たのは先ほどのことである。道路沿いに人家はないと見え、煮炊きを使う焚火の明かりさえ見当たらない。ここはエチオピアの南西部、ケニアとの国境にほど近い所である。この辺一帯はエチオピアでも少数民族に属するハメル族の土地である。私はもちろんのこと、ただ一人の同行者であるエチオピア人運転手にとっても初めて訪れる場所であった。

運転に専念して、長い間押し黙っていた彼がポツリとしゃべった。

「道は間違いないだろうな。いつまで走っても町には着かないじゃないか」

たまに人に会おうと、車を止めてルートを確認していたものの、暗くなってからの頼みは道路地図だけであった。それとて単に眺めるだけのことであったが。

「地図に載っている感じからすれば確かだろうよ。Turmi(次の町)まで200kmということだから、もう少し行けば着くさ」

彼はそれでも不安らしい。

「水はポリタンクにあるから大丈夫だけど、食べ物は何もないな。こんなことだったら、夕方曳き殺したジグラ(ホロホロ鳥)を積んどけばよかった」

「でもあんなにペチャンコじゃ食べたもんじゃなかったさ」

私は気ままな会話を楽しんでいた。

しばらく進むと、私たちは川に突き当たった。橋などは架かっていない。川幅は20mぐらいであるが深さはわからない。車のエンジンを止め、ライトは燈したままにして、私たちは外に出た。

「この静けさ。気味悪くないかい」

聞こえるものといえば、かすかなせせらぎだけである。

「なあに、たまには何もない所もいいものさ」



運転手は、ズボンの裾をひざまでたくし上げると、慎重に川の流れの中央へと歩み始めた。私は煙草に火を点し、ライトの光芒に浮かぶ彼の姿を見守っていた。彼はひき返して来た。彼のズボンは濡れてはいなかった。

「大したことはない。楽に渡れるさ」

私たちの車は難なく川を渡り、そして単調な走り続けた。

Turmiの町には、夜の8時ごろまでに着いた。電気も旅館もない町で、2軒だけあるという現地料理屋も売り切れで閉店だったが、親切にも、この地に駐在しているポリスが夕食をご馳走してくれた。腹を満たした私たちは、車の中で眠りに就いた。

これはエチオピアのガモ・ゴファ州を旅行した際のある日の粗描である。ごくありふれた情景かもしれないが、私にとっては、エチオピアで初めて、しかもたった半日だけ感じたアフリカらしさともいうべきものであった。すべてが私の頭の中にこびり着いているアフリカのイメージと一致していた。

果てしなく延びる道、広大なサバンナ、日中の酷暑、夜の静寂、野性動物、布の腰巻姿で槍を手にしたハメル族の男、牛皮に身をまとい髪を赤土で染めたハメル族の女……。

果たして、エチオピアの辺地でしか通用しない私のアフリカのイメージ。日本にいる時に形成され凝固した、生活・環境・風習の相違点のみが強調されたイメージ。そこには喜怒哀楽を共にできる生きている人間の姿は欠如していた。自分たちの生活を、環境を教育を向上させようと努力している人々の現実には欠如していた。私は頭の中の頑強な偏向アフリカ像を、ハンマーで粉碎しなくてはならない。

少女との会話

コーディネーター 久田 信一郎

「その背中の草重くない」
「おもたい」
「一日何回運ぶの」
「よんかい」
「ほかに何の仕事をするの」
「みずくみでしょう。ぎゅうふんをあつめる
でしょう。ふくをあらうでしょう。えーとい
えをそうじするでしょう」
「それじゃあ、いつ学校に行くの」
「月ようから金ようまで。きょうは土ようび
だからしごとをしなくちゃ」
「豆、これを食べなさい」
「いや、わたしは食べさせてくれるひとがで
きるまでは、ひとからもらわないの」

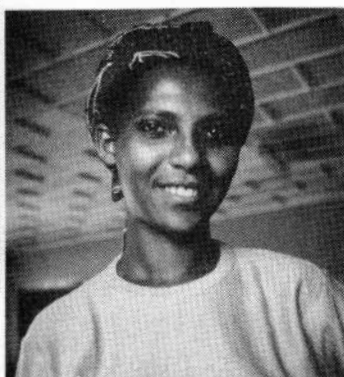
「今いくつ」
「12さい」
「いつお嫁に行くの」
「らいねん。15さいまでにおよめにいかなき
ゃ、おかしいんだよ」
「一日何回食事をするの」
「3かい。あさでしょう。ひるでしょう。よ
る」
「じゃこれからお昼を食べるんだ」
「とんでもない。もう1かいくさをはこばな
きゃ、おとうさんにおこられる。これで2か
いめだもの。おひるがおわってから、もう1
かいはこぶのよ」



薪集めは女の子の仕事(上)
学校帰りの小学生たち(右)

エチオピアの少女は働き者

児島盛之



国際救援の広報担当者もつらいよ!

国際的なボランティア活動には、ふたつの現場がある。ひとつは海外。そして、もうひとつは活動を支えるための、国内での活動。忘れられがちなふたつめの現場の重要性は、そしてその困難さも、第1の現場に決って

テレビの場面——。

商人のテント越しの暗闇のなかから、黄色い歯をむきだしにしてソルガムの殻をむしゃむしゃ噛みながらラクダが首をのばしてきた。エチオピア人はラクダの背の上のズタ袋を手でびしゃりと叩き、そのきしんだ音で穀物の質を吟味する。取り引きは儀礼的な握手で沈黙のうちに終わった。ついに一言も交わされることはなかった。

ラクダは膝まづき、その穀物がはいったズタ袋は他のズタ袋が山のように積上げられている脇に置かれた。それらの袋には、どれも「GIFT OF THE EEC 売買取り引き禁止」とプリントされていた。

なぜあなたは完璧さだけを求めるのか？

3日後に電話が鳴った。

「ニュースを見たんですけど、送った穀物が売られてるそうですね。たぶんOXFAMのものだと思います。わたしはね、クリスマスの前に10ポンド送ったんですよ。もう絶対送りませんからね!」

そのお金を送ってくれた人は、いつも自分はだまされているんじゃないかと思っていたのだろうか、今こそ復讐しようとしているようだった。それにしても、たくさんの人々が死のうとしているのに、どうしてあなたは10ポンドしか送らなかったのか？ あなたにとって、外で1回食事をするくらいのお金ではありませんか？ しかしながら、もしあなたももっとたくさんの募金に応じようと真剣に考えたとしたら…。

「そんなことをするのは、愚かで採算のあわないことです」

「はじめは小額の募金で、それが、どう使われるのかみるほうがずっといいですよ」

と様々の説がながれている。

ついに人々は思いがけなくも、探していたものを

おとるものではない。

これはOXFAM（オックスファム。イギリス最大のボランティア団体）のエチオピア広報担当、トニー・ヴォークス氏の手記である。

（ニュー・インターナショナル誌より）

見つけたのだ——これ以上金を出さなくてもすむ言い訳。彼は私の返答を聞かずに乱暴に電話をきってしまった。

「私たちの送ったものではありませんが、おそらく空になった袋が転売されたものでしょう。エチオピアの人達は、何だかってすぐには棄ててしまうことではないのです。なにぶん、貧しい国ですから……私たちはスタッフを信頼しています……。」

つねに正義がなされているわけではない

職員は受話器を置き、釈然としない思いで昼食のため食堂へ向かった。

私たちは、人々を啓発しなくてはいけない。

それはよくわかっているが、現実がそれほど単純でも希望に満ちたものでもない場合はどうだろう？ ましてや送られた穀物がエチオピアの港でとどこおり、必要としている人々へ届いていない、それも破廉恥な役人が、荷をぬいて2、3トン売りとばすというのではなく、エチオピア政府が他の地方へまわしているからだ、という場合はどうか？ また、その大部分がゲリラに支配されているエリトリアやチグレといった北部の州では、千人単位で人が死んでいるにもかかわらず、何も送られていないという場合はどうするか？ エチオピア政府はそれらの地域へ食糧を配布することを拒否している——いわゆる、政治的決定。

こんな時、私たちは人々へなんと答えたらいいのか？ それは非常に微妙な問題だ。私たちは政治団体ではないし、政治問題になにか発言するような立場にもない。しかも、アジスアベバの事務所で働く職員の安全は考えなくてはならない。私たちのちょっとした発言が彼らを危険にさらす場合もあるのだ。そして、再定住計画…。

100万人以上の人々が比較的人口の多い高原地帯

から南と西の人口の少ない地域へ移されることになっている。計画の促進のために移住に同意した家族にだけ食糧が与えられる。各ゲリラ組織は、この計画は彼らを支持する地域の人口を少なくするための巧妙な策略であると非難している。彼らによると、再定住計画は反政府勢力の支配地域へは食糧を送らないという決定と同様に、きわめて政治的なものであり、エチオピア政府へ食糧を援助している外国の団体もその政策を支持していることになる。

しかし、私たち、OXFAMが政治団体ではないのは明らかで、とてもそのような議論には加わることはできない。今、必要とされていることに対応するだけである。

エチオピアの飢餓の真の原因はなにか？

コーヒーがさめてしまった。このコーヒーもたぶんエチオピアから輸入されたものだろう。コーヒーはエチオピアの外貨獲得源の最大のものだ。しかし、それをつくる農民はその恩恵を受けてはいない。

もし、あなたがエチオピア国内を旅行すれば、コーヒーの闇取引の疑いで取調べを受けるかもしれない。アジアではコーヒーは生産者価格のなんと4倍で売られている。それでも農民はコーヒーを作り、安い値段で売り続けなくてはならない。彼には割当量があって、損が出ようがコーヒーの木を切るとは、違法なことなのだ。

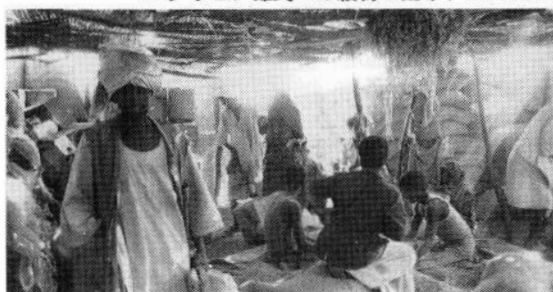
穀物についても事情はたいして変わらない。農民たちは、時には生産にそそごこんだ費用よりも安い値段で政府に売り渡さなければならない。その結果、余剰を出そうという農民は、ほとんどいない。土地には何も作らないほうがよいくらいだ。そこには、土地を手入れするといったことや、防虫防疫やかんがいといった視点はないのだ。そのような耕作されない土地は他の農民に振り分けられるのである。どちらにしても、それはたいへんな仕事で、それを進んで引き受ける者もないのだ。

多くのものは、徴兵され軍隊に入る……。

アフリカ最大の軍隊に……。

飢餓の原因はなんだろう？ 干ばつ？ エチオピア政府が親ソ政権だから西側からの援助が少ないからか？ なかには都合のいい理由が見付かるかもしれない。

コーヒーカップはすでに空だった。職員食堂にはもうだれもいなかった。いまにも階下のオフィスで電話がなり、こう言ってくるだろう。「テレビで見



たんですが、援助した穀物が売られているんですって？」

問題はそういったことではないのだ。問題なのは、穀物が移住に同意した人々にしか配布されないということ。食糧が人々を移動させる目的で使われているということなのだ。再定住すること自体は、なんらかの正当性があるのだろうが、人々が現に生活している場所で、農業の改善のために、いったい何かなされたと言えるのだろう。自作農への保護、あるいはより高い政府買入れ価格、そんな政策がとられていたら、高原地帯の状況は確実に今とは違っていただろう。どっちにしても再定住計画の施行はあまりにも性急すぎた。それは人々に多くの苦痛と緊張を強いることとなるだろう。

矛盾にみちた救援現場は多いけれど

カンブチアの恐怖… 大虐殺が終了するまで外の世界から隔絶されていた国。そして、新しい政府のもとで活動する援助団体が分かったことは、国連による、国境の反対側からの援助の小麦が、追い詰められたボルボト派のゲリラ村に注ぎ込まれる一方で、プノンペンでは自分たちの持って来た穀物が役人を養っているということだった。

あるいは、ソマリアではどうだったのか…。国連は難民の数を問うことでソマリア政府との関係が悪化するのを恐れ、水増しされた量の穀物を供給し続けた。

雨の雫が窓の表面を伝って落ちていった。この雨の雫の幾つかはアフリカで降る雨と関係があるのかもしれない…。しかし、たとえアフリカで雨が降ったところで、戦争や搾取といった人間が人間に対して行なう非情な行為は存在し続ける。

オフィスに戻るといい知らせが待っていた。「小麦が売られていたっていう話があったら？ だれかがよく調べてみたら、名前も場所もまったくのたためだったそうさ…。これで、みんなに心配するなって言える……。」 (竹内 俊之訳)

ホームランド入国の記

加納 妙



ホームランド・ベンダ

ルイ・トゥリハード行きは夜行列車は、ガラすきだった。「白人専用」といった表示こそ、塗り消されているが、同じ2等でも、明らかに分けて乗せている。私は、白人として分類されたようだった。YMCAで一緒になった、前世代の遺物的善良な白人青年、アンドレが、駅まで荷物を運んでくれる。私の隣部屋の青年たちをさして、「兵役に出る所だ」と教えてくれた。ジンバブエとの国境近くに、大きなキャンプがあるという。窓ごしに、家族や恋人とのわかれを惜しんでいた。

ホームランド…私は別にたいしたことを知っていて、行ってみようと思ったわけではない。白人たちが『自分の国』を守るため、多数の黒人に申し訳程度に与えた狭い土地…これに怒って、「アパルトヘイトとは土地問題だ」と語る黒人リーダーの話をうろ覚えでいたぐらいだ。

そうしたホームランドの1つ、南ア北東に位置するベンダで、ミッション病院の看護婦として20年以上働いていたという白人女性に会った。がんこなおばさんだったが、私が行きたいというと、ルイ・トゥリハードまで電車で、あとはベンダまで毎土曜バスがある、と教えてくれた。あいにく私がヨハネスを出たのは土曜の晩、着いてもバスはないはずだった。入るのに許可証はいらないか、他にいく手段はないのか、駅でも他でも、あれこれ聞いてみたが、それぞれいらない、ない、という返事。が、とにかく行くことにした。私は基本的に一方の側だけの情報というのを信用していない。

列車は闇の中を北へ向って走る。途中の景色はほとんど見えなかったが、ルイ・トゥリハードに近づいたころ、白々とした朝焼けの中に灌木の続くサバンナが姿をあらわした。駅につくまで、さして変化もない。

ルイ・トゥリハードは、高い建物の少ない、だだっ広い感じのする田舎町だった。着いてすぐ、悩む間もなく交通手段を見つけてしまった。何台ものミニバスが並んで、次々に客をひろっていたのだ。私

に、バスは週1本と教えてくれた彼女は、黒人たちしか使わないミニバスなど使ったこともなく、駅前に並んでいても、ほとんど意味あるものとして目に入ってこなかったのだろう。運転手の一人が私を手招きして「シバサ？」と聞く。地名だった。ベンダ内の町であることを確認して、後座席に乗り込む。

バスは、満杯になった時点で動き出した。ヨハネスや他の町まで、買物や働きにいていた人が多いようで誰もかれも大荷物を抱えている。町まで約30分。丘にへばりつくように点々と茅葺き屋根の民家が見える。広い茶畑が見える、と思ったら、白人が農場主のプランテーションだそう。ホームランドと言うので白人は住んでいないのかと思っていたが、こうした農園や、布地工場を経営して暮らしている人もいるそう。町のバスデポに着いたのは朝まだ早い時間。さして大きな町ではないが、こじんまりとして丘のふもとには大学と病院とホテルが1つあった。

拉致される!

午後近所の教会の礼拝をのぞくことにし、小さな食堂に入って豆をほおぼりながら、暇のつぶし方を考えた。隣の青年はヨハネスの大学生で、休暇を使って友人の所へ遊びに来たそう。ツツ司教のことを聞いてみると、「悪く言う人もいるけど僕は好きだ」との返事。しかし更に詳しく聞くと、当世大学生はどれも同じなのか、彼もあまり政治的でなく、「まあいい人と思うから、なんとなく…」というこらしい。

食事を終えて外に出ると、折良く暇つぶしの種(私にとってか、彼らにとってか、)が、ころがっていた。出口でバツリ警官の一群と出くわし、拉致されたのだ。…または保護された。彼らは私が許可証無しで入国していると知り、不法侵入だとクレームを付けた。ここで非を認めては負け、とすでにかなりアフリカナイズした頭の私は、「ヨハネスではそんなもんはない、と聞いてきた」と正当性を主張する。が、リーダー格の男は、「ベンダは制度上不備

がまだあるとは言え、独立国であり、ヨハネスに大使館もあってビザを発行してるのだ」と厳粛に宣言。私は混乱する。独立国？大使館？ホームランドの人々はおし込まれていることに怒っているのではなかったのか？それとも目前の目つきの険しいこの黒人は、いわゆる権力の犬なのか…

ともかく私は署へ連れて行かれた。窓に金網の入った護送車に乗せられて。フォーム記入後、女性検査官にボディチェックを受ける。ボタンがはち切れそうな栄養のゆきとどいたお腹をじゃまげに、彼女は私のリュックの中身を丁寧に調べる。別に困るものも無いし、とのん気に構えていたら、困るものが出てきた。葉莢だ。使用後のものだが、モザンビークでひろったものだ。これはなんだ、と私の前に葉莢をかかげて見せる彼女に、私はできるだけなげない顔を作り、由来を説明し、不利な立場にやられたウディ・アレン風に肩をすくめてみせる。と、ここへちょっと意地悪げな顔付きの治安担当官が入ってきた。映画なら、私はあたふたと葉莢の前で手をふる所かも知れない。が、彼女はそ知らぬ顔で荷物を順にリュックへもどしはじめ、治安官にはわからぬよう、私にウィンクをなげてよこした。

こんなことで私は無事警察から釈放となる。聞くと以前隣国（モザンビーク？）からゲリラが潜入、署の一部を破壊したことがあるそうだ。私にはこんなバラック小屋の、ちっぽけなベンダ独立国警察署のどこに潜入して破壊するほどの価値があるのか、よくわからなかったが…

このあと、ザ・ポリスは打って変って過剰サービス、先の護送車をタクシーがわりにシバサ周辺を案内してくれた。（今度は前座席だったが）要は暇だったのだ。何人かのアジア人に会った。学校や病院に勤めるといふフィリピン人やインド人。ベンダ政府との契約で来てるそうだ。暮らしてごちは、平和でよい所だ、とのこと。平和ねえ…土地の人にとってはどうなんだろう…といぶかっていたが、どうもこの日会ったベンダ族の人々は皆、むこうから、「どうだ、ベンダはいい所だろう」と自慢するのだ。狭い所に入れられて怒っていると信じていた私は、肩すかしをくわされた気分であれっ？とってしまう。

何なんだ？これは。もちろん1見たことで10を語ることは禁物だ。他のホームランドも同様とは決断して言えない。しかしこれも1であることは事実だ。こうした与えられた地にあまんじている人々もいるということも知らなければ、今南アでおきている事

柄をつかむのは難しいように思う…。

聖なる水

午後予定通り ZCC 教会を訪れる。1910年南ア内でおこり、黒人の間に広まったキリスト教の一派ということだが、どこか何かへんでこな印象がある。例えば緑のフェルトの上に真鍮の星のついたバッチ。例えば、創始者は目ざめる前、車掌さんだったんじゃないかと思わせるような茶色の制服に黒帽。ヨハネスで会った信者の「自分はクリスチャンで、政治にかかわる気はないが…」というせりふの多発。（これは他の宗派でもよくあるが）

教会自体はレンガ長屋造りの質素なものだ。礼拝は、広場での歌と踊りの後に始まった。礼拝堂の中では、教会のえらいさん風人物が順に説教をする。よほど外人がめずらしかったらしく、いちいち長々と私の訪問に感謝の意を表明してくれるのには閉口気味だったが、実は礼拝の最重要部は、1人1人合図で呼び出され、外で行われていた。私も呼ばれて出てみると、2人ずつ囲って、地面にうつぶせて何やらぶつぶつやっている。聖霊のとりついた巫女が聖託をのたまっているのだった。私には通訳付きでやってくれた。私の来訪は神の意、帰路は守られよう、とか。…ふむなるほど。洗礼の儀も毎週やるらしい。牧師がカンの水を火で清め、前後と手足にしぶきをかける。服がぬれようと顔が冷めたかろうと平気だが、このあと一口のめ、とさし出された時には困った。南アといえ田舎の生水だ。口にふくむだけふくみ、どうすべきか30秒悩んだが、決断のつかぬまま、話しかけられた拍子に飲み込んでしまった。残りの水をビンにつめ、牧師は私にこういった。「困ったり病気になったら、この水をのみなさい。何でもなおります」私はこの後、水のせいか、お腹をこわしたが、治療にまたこの水をもうとは、思いつきもしなかった。ああ救い難きは信仰薄き者よ…。

帰りのバスの中で思った。実は、ベンダーヨハネス間には直通バスすらある。なぜ白人たちは、誰もそのことを知らなかったのだろうか。そこに暮らしていた人たちでさえ…。自分たちを囲み込んでしまうことのやさしさと恐しさを、私は感じざるを得ない。しかし、他人事として笑えるだろうか。私たちの周りにも、実は多くのベンダ行きバスがあるのかも知れない。少し立ち止まって、自分の周りを見まわした方が良いのではないだろうか。

87年度の

タイ地域開発のめざすもの

岩崎美佐子

連合体として活動するタイのNGO

昨年のタイにおける地域開発運動の全体の動きを振り返ってみると、部分的活動からより総合的活動に、しかもそれぞれの団体の各部門別の活動から、連合的、共同的活動に広がってきているといえる。青少年および子供の問題を対象としたNGO、農村開発にたずさわるNGO、都市貧困層にかかわるNGOなどそれぞれの組織化も進み、連合体としての活動やその連合体同士の交流も活発になっている。

JVCも都市問題に取り組むNGO、8団体の連合体である、CCSD (Coordinating Committee For Slum Development) の主要メンバーとして、共同セミナーの開催、NGO間の相互援助(例えば昨年 Redd Barna <1 NGOの名称>の活動地域の保育所兼集会所の建設にJVCの古材を提供したが、今年はナンシー<JVC活動地域>に小さな図書館を建設するにあたって彼らが資金援助してくれる)、またお互いの活動の評価などを活発に行っている。

教育活動

JVCの地域活動としては、(1)奨学金(2)図書活動(3)移動教育センター(幼稚園の先生や地域の母親たちを対象に、保育方法を指導する)、及び(4)再定住活動の4つの活動を行っている。(4)の再定住以外の活動、すなわち教育活動は、活動開始当初は社会福祉の要素を強く持っていた。しかし現在ではきめ細かい地域社会との交流を通して(例えば奨学金を受ける子供たちの選考を地域の委員会を通じて行うことによって、個人的問題というより地域社会全体の問題として考えると、移動図書箱を複数の地域で自主的に持ち回って運営することを通じて、地域間での交流・情報交換をはかるなど)単なるサービスを越えた地域開発活動に広がりつつある。

再定住活動

再定住活動は開始当初から社会的なものであった。バンコクには5年前に400あると言われていた貧困

層居住地域、いわゆるスラムが現在では1020あると言われている。バンコク人口600万人の内、120万人、つまり5人に1人がスラムに住んでいるが、その解決策としては高層住宅の建設などさまざまな方法がとられてきたが、なかなかうまくいっていない。そして最近NHA(住宅公社)が試みたのが、バンブア、ラッカバンという郊外再定住である。

ビルマ、ラオス、カンブチア、ベトナムなど近隣社会主義国への出入国規制が続く中で、バンコクは東南アジア大陸部における唯一の国際都市、中継都市としての役割を強めてきた。それに伴い、効率的土地利用、交通網の充実、街の美化などの目的で都心の整備が進められた。まず移設の標的となったのがスラムである。土地問題が解決し、継続して住めることになった例外中の例外スラムを除けば、ほとんどのスラムが立ち退きに直面していたり、その潜在的可能性におびえながら、不安定な生活を送っている。

NHAの提供した再定住地は地価高騰もあって、都心から約30キロと遠く辺鄙なところである。定職や交通手段を持っている中産階級には定住可能であっても、その日暮しの人たちには、時間、交通費、職の機会などのすべてを考えてみても、生活不可能な遠さであると言える。事実、420世帯を予定した分譲地は85世帯の定住者を迎えたのみで、今後の継続的定住の見通しもたっていない。

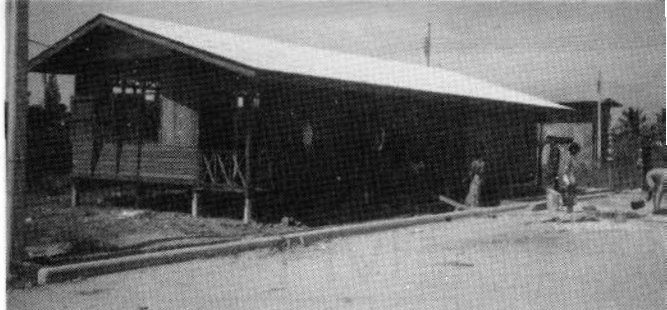
しかし中にはラッカバンに来る以外、選択の余地の無かった人たちもいる。JVCはそれらの人々と新しい地域作りをめざして来た。ラッカバン定住の第一陣はクロントイからの移住者であり、彼らの住宅建設にあたっては、JVCを含む3つの団体の協力と、元JVCスタッフ、ウティパンの献身的努力もあって大成功を収めた。しかしその後、他の2団体とウティパンがそれぞれの事情で手を引き、後続のルンピニヤやその他複数の地域からの移住者グループ間の軋轢を生んだ。

このような困難な状況で活動を引き継いだJVCの後任スタッフ、コメンは、住民たちに「ケチ」とののしられながら、まず問題の本質は何か、解決の糸口はと探っていった。小集会を重ね、本音を聞くと同時に住民と一っしょに問題を分析し、解決の方法を討論した。むやみに資金の貸し出しもせず、しかし本当に困っているところには惜しまず、クロント

イ・グループからは少しずつ返済を受け、ついには各グループ合同の仮委員会を結成して保育所兼集会所を建設するまでに至った。地域内に住む4人には市価より安い日当を払い、あとはボランティア（昼食費支給）の協力によって、25日間で建設することができた。これは住民のコメンへの信頼があって初めて可能となることである。今年の1月4日開所、46人の児童の保育を行っている。なお、運営費に関しては、地代をNHAが、地域内採用の教師の給料をバンコク市が負担している。コメンは今後の活動について、本委員会の結成、また地域で収入を得る方法を住民と共に探っていくことだと言っており、すでに活動を開始している。

図書館建設

懸案のクロントイ図書館は以下の利点を考慮して建設に踏み切った。(1)クロントイに建設することはクロントイがスラム開発の中心地になっていることなどから、他地域での活動を容易にする。(2)地域開



発事務所の併設で、家賃の節約をする。(3)現在スペースの問題で分散している、図書活動にかかわる3スタッフが1カ所に集まることができ、合同活動が広がる、などである。これも地域内から職人を集め、在来工法で建設しようとしており、将来、タイ地域開発にかかわるNGOの一拠点として機能することが予想される。

農村開発へ

また、農村へも活動を広げ、近代化によって低い位置に落とされられた農民の真の自立へ向けての可能性を探ろうとしている。NGOによる約10年の農村開発は少数の、しかもカッコつきの成果しか見えない。その上政府の開発はますます農民生活を困難にしているが、すべてを踏まえた上でJVC式開発を試みる。

名古屋での報告会を終えて

JVC愛知県支部 浅井陽次

ありのままのタイの話を聞こうと11月6日、名古屋の中部リサイクル運動市民の会事務局で、一時帰国中のタイ・スラム地域開発チームのスタッフ、佐藤正喜さんによる報告会が催されました。

「もっと知りたいタイの素顔」と題されたこの報告会には、岐阜市や豊田市、瀬戸市から会社員、公務員、教員、学生、リサイクル運動のスタッフなど20人余りが集まりました。スライドを交えたホットな報告で、なかなか興味深い内容でした。

給水プロジェクトでの井戸掘り、ポンプ改良の苦労話、村人への衛生教育や農村に根強く残る精霊崇拜の風習、焼畑、稲作の様子、そしてスラムの変遷、再定住者への資材援助など地域開発プロジェクトの状況が、佐藤さんから話されました。

さらに、「われわれ日本人はインドシナ難民、アフリカ難民の窮状には一時的に関心を寄せ、募金も集まりますが、スラム居住者のような第三世界の一般民衆への地道な活動に対しては無関心です。もっと

草の根レベルの開発協力に目を向けるべきです」と述べられ、私たちは改めて、日本の援助、協力のあり方を考えさせられました。

また参加者からは、農村の疲弊とスラムの形成とはどうつながっているのか、タイのNGOはどのような活動をしているかなど活発な質問が出されたり、かつて活動を共にした仲間からは思い出話が出るなど、終始なごやかな雰囲気でした。

佐藤さんの3年半に及ぶタイ生活でのさまざまな出会いについても語られ、タイの素顔に触れることができた2時間でした。

アンケートによる参加者の声は以下の通りです。

- (1)タイのふつうの人々のふつうの生活を飾らない言葉で聞け、素直に楽しめました。(テレビなどで見るアジアには異和感を覚える) — 女性
- (2)JVCの具体的な活動を知るよい機会となりました — 女性
- (3)すばらしい企画です。もし事前を知っていれば、私の生徒にも話をしていた良かった — 男性・教員
- (4)障害者施設でボランティアをしたことがあり、スラムの援助、自立の問題は障害者問題と共通する部分があるような気がした — 女性・大学生

MY DEAR FRIEND

JVC愛知県支部を作ったよ

平野 恒弘

JVC愛知県支部母体になった“東海JVC”は、中部リサイクル運動市民の会が行った古本フェアを愛知県下のJVC会員有志が手伝ったのをきっかけに生まれた。JVCの活動者がこの地方にやって来た時などに中部リサイクル事務所の一室を借りて（現も同様）懇談会形式で学習を続けてきた。

去る11月23日に行なわれた「デッサ・ケサダ・ネグロスシュガーコンサート」の主催団体の一つとして参加するため『会員有志』や『東海JVC』では一般の人々にわかりにくい『日本国際ボランティアセンター愛知県支部』として旗揚げした。しかし支部としての規約や定まった方針や今後の展望というものは作らなかったし、今後も作ることはむずかしいと思われる。なぜなら地方においては専従の者をおくのは財政的に不可能で、メンバーもそれぞれ職業や学校があるし、交通の便も不自由なため、連絡をとりあって一同に会することさえ一仕事であるからだ。

JVC会員は県下に約30名いるが、そのほとんどはお互い面識がなく、JVCに関する関心度もまち

まちなので、それをまとめて一つの方向へもってゆくのは不可能である。だから支部を作ったからと言ってもとりあえずは、今まで有志でやってきたことの延長線上の活動を考えている。

つまり、ある企画を思ったら、その人自身が呼びかけてゆく。会員、非会員を問わず賛同する者が集まれば、そこで行動開始というわけである。頼りないようだが、私のこれまでの経験では、これがなかなか有効でおもしろいのである。

これまでも、JVCなのになぜかシャブラニールの活動者を呼んで話を聞いたり、中部リサイクルの企画を応援したり、アジア保健研修所のオープンハウスを手伝ったりしてきた。これからもおもしろい企画ならなんでも関わってしまおうと私は思っている。

今回のデッサ・ケサダさんのコンサートのよういくつものNGOが共同で主催する時や公共の場で催し物を行う時、広く一般市民に呼びかける時など日本最大(?)の海外援助NGO“JVC”のネームバリューは捨てがたいのである。

なにか企画をおこす時にも、呼びかけ人が「ひかえい！我こそはJVC愛知県支部長なるぞ」と宣すれば、色々やり易いのではないのでしょうか?!それを期待してがんばってみます。

『フィリピンの挫折』

フィリピンの苦況の原因を探る

福村 州馬

“ピクニック革命”とも呼ばれた去年2月の政変以来、特にメトロ・マニラではマルコス時代に比べ、言論や表現の自由が大幅に認められるようになったようだ。しかし首都に漂う自由な雰囲気とはうらはらに、地方の農村部では反政府ゲリラ掃討と称した軍事化がさらに進行中と伝えられる。“革命”は農村にまで届いていない。

長い圧政のあと、ようやく希望の光が見えてきたとはいえ、農民や漁民、一般労働者など大衆の生活

は相変わらず苦しく、国民の70%が貧困状態にあえているといわれる。260万の完全失業者のほか、それと同じぐらいの不完全失業者がおり、ピープルズパワーを背景に生まれたアキノ政権への一般国民の期待は大きい。それに答えてアキノ大統領も貧困の解消、雇用の拡大、富の再配分（農地改革を含む）を最優先事項と宣言し（マルコス大統領も同じことをよく言っていた）、経済の再建をうたっている。

しかし問題はマルコス政権の残したツケ、260億ドル（1ドル=160円で4兆円余り）の対外累積債務である。フィリピンの国民総生産の70%にあたるこの莫大な借金は、今年度分の返済金だけでも31億ドル（約5000億円。そのうち28億ドル=4500億円が利子払い分）にのぼり、これは日割り計算する

と、毎日850万ドル(=13億円余り)という巨額な数字となる。借金返済のためにさらに借金をしなければならぬという悪循環に陥っているのがフィリピン経済の現状である。

金、銅、クローム、ニッケル、木材、ココナツ、砂糖、バナナなど豊富な資源に恵まれているにもかかわらず、フィリピンはなぜここまで苦況に追いこまれたのであろうか。この疑問を解く大きな鍵を与えてくれるのが本書『フィリピンの挫折—フィリピンにおける世界銀行』—であろう。

世界最大の開発援助機関であるはずの世銀がその姉妹機関の国際通貨基金(IMF)と手を携えて、フィリピン経済をいかに従属させ、がんじがらめにしていたか(フィリピン側からそれを手伝い、私腹を肥やしていったのがマルコスとその盟友たちであったのは言うまでもない)。また、米国政府の戦略と米系企業群の権益に沿っていかに忠実に働いたかが詳しく描かれている。

本書はケーススタディとして世銀の活動を調査したものであるが、1973年、米国中央情報局が仕組んだといわれるチリのアジェンデ政権(注1)崩壊に先立ち、援助を断ち切ったのが世銀であったことなど、世銀が米国の意向を反映して働いているという主張

の一つの例証になるかもしれない。しかしこの本の特長は何と言っても、6000ページに及ぶ世銀内部の秘密資料——「絶対的貧困にあえぐ世界の8億の貧民層の基本ニーズを満たす農村開発を最優先に」という当時の世銀総裁、マクナマラ(注2)の美辞麗句にひかれて70年代に入行した若いテクノクラートたちが内部告発網を作り、これらの資料を持ち出した——に基づいて書かれていることであろう。

いずれにせよ、私たちがフィリピン大衆の抱える問題や彼らの主張を理解しようとするならば、本書はその大きな一助となるに違いない。また、蛇足ではあるが、世銀と緊密な関係にあって“ミニ世銀”とも呼ばれ、日米両政府が圧倒的な影響力を持っているアジア開発銀行(略称ADB:総裁をはじめ、いくつかの主要ポストを日本が占めている)の実施している“開発援助”についても二国間援助と同様、誰のためにどう使われているのか納税者として知りたいところである。

(鶴見宗之助訳 三一書房 3200円)

(注1) 民主選挙で誕生した社会主義政権。当時チリには多くの米系企業があった。

(注2) ベトナム戦争当時、米國務長官を一時期務めた。

『実践国際人権法』

本橋 栄

国連には、人権侵害に関する報告や救済を求める申し立てが毎年世界各国から3万~6万通も寄せられるという。著者が国連の人権担当官として、実際にこれらの通報を受け取り処理する機関のひとつ差別防止及び少数者保護小委員会(通称『人権小委員会』)で働いてきた経験に基づいてこの本は書かれた。国際人権という考え方は戦後のもので、人権の保障は一国の国内法とその国民自らの監視だけでは必ずしも充分ではない。そもそも国家権力からの「自由・解放」として「人権」は生まれたという認識に立っている。

1970年代に多くの人々の努力によって形作られてきた国際人権基準やその実施手続き・人権侵害の申し立てなどのメカニズムが、実際にどのように働いているのかを本書は教えてくれる。

もしあなたが重大な人権侵害についてそれが最後の手段であると判断するならば、経済社会理事会決

議1503の「人権及び基本的自由の侵害に関する通報の処理手続」に従って国連に通報することができる。この本には文例つきでその書き方、言葉使い、提出の時期までが示されている。全ての申し立てが、とり上げられるわけではないが、リストに載せられた通報については当事国にコピーが送られ政府回答が求められる。その後非公開または公開の審議が行なわれる。時間もかかり、強制力をもたないとはいえ、その過程で政府が政策変更の日程を早めたり何らかの対応策を取るといった効果がみられるようだ。

政治の力学の錯綜する国際社会において特に人権保障の分野を支えているのはNGOである。政府の代表からなる人権委員会と異なり、個人の専門家からなる人権小委員会には、アムネスティ・インターナショナルや国際法曹委員会などの人権NGOから続々と人権侵害に関する詳細な報告が寄せられる。国連でもそれらの資料については信頼が高くその通報をとくに慎重に扱うという。国連の財政難を理由にその人権小委員会が昨年から一年間休止されているということだが残念なことである。

(久保田 洋著 三省堂 2600円)

◇ソマリアで水車と風車が完成◇

ソマリア、ジュバ川のほとりのJVC農場に、風車と水車が出来上がった。もちろんまだ実験段階なので、1年周期で様々なデータを集め、改良を加えていかなければならないが、それでもルークでは日本のNGOが何かを始めた、と大きな期待をもって見られている。

これは「風の学校」の提唱者で農学者の中田正一先生（80才）が1985年8月にソマリアを訪問し、自然のエネルギーを使ってジュバ川の水を揚水する必要を感じられたのがきっかけだ。従来のディーゼルポンプでは燃料が高く、故障が多発し十分に稼働しないこともあった。中田先生が日本に帰ってから風車研究家の加藤博さんと開発したのが今回の風車と、水車である。ビニール袋三角帆六枚でできた直径3.6mの風車は、一回転すると手押しポンプが一回上下し地下水をくみ上げる。水車の方は強化プラスチック製の翼八枚を持つ直径1.6m幅1mのもので、ジュバ川の水をくみ上げる。川には年中水が流れて、平地には強い風が吹く土地柄なのでそのエネルギーを生かさないと手はないが、実際に動かしてみると、いろいろな問題が出てくると思われる。JVCの農場は川から奥に広がっていることもあって、揚



設置された風車の前で
(左から三人目が中田さん)



水車をジュバ川に
浮かべる

水量が十分でなく、風車の方は風まかせで安定性がないという。また両方に言えることだが、素材が現地で調達出来ないということなど、もう少し改良の余地がありそうだ。ともかく何基で何haの灌漑が可能か、コスト的にはどうなのか、とかいろいろ検討して、その結果をまた1年後にでもまた報告したい。

◇MSGの輸出をやめよう—JVC勉強会◇

勉強会が月1回事務所で開催されている。12月8日（月）は6時半から9時半まで「有害物質を輸出するな—日本とMSG輸出—」と題して、里見宏氏の話があった。里見氏は厚生省公衆衛生所衛生員で、スモンなどの薬害について研究をしてこられた方だ。今回の勉強会には約20名が集まり、改めてMSGをめぐる様々な問題について考えた。

MSGというのはモノソディウムグルタメイトの略で、いわゆるグルタミン酸ナトリウムのことである。本来化学調味料は使わなくてもいいものだが、味にうま味が増えるということで、必要以上に摂られている現状がある。MSGはアミノ酸の一種だが、昆布などから摂るなど食べ物に自然に含まれているものだけで複合的においしさを出せばいいのではないか、というのが里見氏の考えである。MSGは一

度に大量に食べると気分が悪くなったり、吐き気がしたり、場合によっては気を失ったりすることもあるそうだ。日本では既に副作用や発ガン性のある物質だとして敬遠され始めてきたのだけれど、その失地分を回復しようとして、企業は、市場を東南アジアに求めたのはもうよく知られたことだろう。日本では「砂糖きびが原料の自然食品です」という言い方で、あたかもMSGが化学的に加工されたものであることを忘れさせようとする宣伝がなされているが、東南アジアではもっとストレートな宣伝がされているという。MSGの味を人々に覚えさせるために、ビーフンや米におまけとしてつけたり、貧しい人々がおかずのかわりに御飯にふりかけて食べているという。先に来日したタイの女性が販売攻勢は止めてくれと訴えていたのを新聞で読まれた方も多だろう。

JVCプロジェクト

1986年12月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3日曜日 午後1時～4時 学習会 第4月曜日 午後6時～9時</p>	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 柴田久史, 佐々木志保, 加納 妙, 前川昌代, 佐久間典子, 古西 勇, 鶴田三芳, 他15人
日本国内	<p>●日本語家庭教師 新体制のもとで, 神奈川県下のボランティアを募集した。オリエンテーションは①難民について, 活動について②日本語教授法について③法律についてと3回行い, 定住センター訪問など活動のための準備に力を入れるようにしている。 12月14日(日), 埼玉県柳崎でキャンプチアの人々を中心に年忘れパーティを行った。 12月21日(日)神奈川県大和市でも, インドシナ三国, 地域の人など200人以上が集まり年忘れパーティを行った。『そんぽっと』編集の落合が渡タイするため, 編集者を募集中。</p>	ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部 国際婦人福祉協会	森山久寿子, 落合正幸 地区連絡係10人 他約50人
ソマリア モガディシュ 事務所	<p>渉外, 事業計画, 会計, 総務。</p>	UNHCR R.I. ジャパン 創価学会文化・ 平和運動事務局 ジャパン・タイムズ	嶋 紀晶, 浜野敏子, シアッド
マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進/定住 難民と地元民との話し合いにより定住地を決定し, 給水用の井戸も試掘した。アグロフォレストリー区での植林を終え, 農民や農民以外の難民へも苗木を配った。 unit2の拡張工事が終了し, unit5の工事が本格化した。またマグドール・キャンプのあった地区には約5,000人の難民が残っており, 彼らの動きも見守っている。</p>		荻ノ迫善六, 榎田秀樹, 法橋 亮, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ, 船川秀夫, 五十嵐裕昌, アブディ・ジョフ, フセイ ン, アハメッド, ハッサ ン
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健/補助給食 コミュニティ・ヘルスワーカーや助産婦の訓練が定着化している。 ●植林 4haの拡張分に植林する苗木の育苗を開始。 ●インカム・ジェネレイティング(難民が現金を得るためのプロジェクト) ドンキー・カート(ロバ車)の貸しつけ台数の増加を検討中。またバン屋の建設を始めた。 ●教育 具体的な調査に移行した。</p>	朝日新聞厚生文化事業団 モラロジ- MIRC 仏国土をつくる う会 砂漠に種をまく 人の会	掛村 均, 米澤 聡, 中路美和子, 庄司 美, 高畑辰弘, シュクリ, ハッサン, アブディ, シュイク・アブディ
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進 マーシャに深井戸を2基掘る作業が, 現地政府の機関の協力のもとに開始された。料理, 家庭菜園の指導を含んだ栄養教室も, 低体重児を持つ家庭を中心に行われている。 種子銀行は来季に向かって準備中。モデル農場ではアグロフォレストリー用の樹種の育成実験と現地農法での農業を実施している。</p>	CRDA, 西本 願寺, チャリテ ィ・カレンダー, チャリティ・サイ クル, メリノール 修道士会, 全老 連, バンド・エ イド	内山田 康, 林 達雄, 伊藤達男, 伊藤幸子, 久田信一郎, イエットベルク, ソロモ ン, バレタ, フェテルワ ルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、カモン・ミンムアン、クリッサダ・タウイバサ石原淑子、他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 専門家の協力を得て、クメール人教師の技術及び設備の安全指導を行った。国境で活動する救援団体から機材の作成を依頼され、ワークショップで作成中。また生徒の卒業試験も25日に終了した。	UNHCR R.I. ジャパン 妙心寺派宗務所 花園会	熊木政江、谷山博史、 矢野和貴、ソムヨット・ ラタナタム
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 12月12日に妊婦、13日に3歳以下の受給者適格検査が行われた。今回よりCentral Registration Systemを始めたので、これ以後は3歳以下の適格検査は行わなくてよいことになった。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、 トンチャイ、スリペン 蓮尾慶治、仲田奈々子、 ソムボン、スピチャ、 エンドリアン、ソムサク
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み、書き、聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム ペーパークラフト、リズム音楽、集団ゲームなど。	天理教千葉	浜崎妙子、大場きみよ アナン・ブッタミリンパティ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため、NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 ラブレ、ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内のスラムの人たちへの資材援助(長期資金貸与方式)。	モラロジーMIRC、 NTV、JOFIC 庭野平和財団 京都国際青年委 員会	ヴァラナート・チュンクン、 サムルエイ・ジョンヨ ークラン、アルニー・ス ニット・ムンナイ、リー ラ・クンナロン、スワン ・リンサムベン、コメイ ン・スンサマラ 佐藤正喜
カンブチア (ブノンベン カンダール省 プレイベン省 スパイリエン省)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 建築中の救援のためのワークショップ/技術学校は3月末か4月初めにオープニングを予定している。11月中旬にユニセフ・ブノンベンと補助栄養給食プログラムにおける協力を合意。87年度には人材(医療・栄養)を派遣する予定。 ブノンベン市に芝刈り機、ゴミ箱用の資材を提供。 OXFAMと共同で井戸掘りも行っている。	日本青年会議所 関東地区協議会、 全老連、創価学 会文化・平和運 動事務局 モラロジー MIRC 立正佼成会	熊岡路矢、簗田健一
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会(ICM)-第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	青井千恵

闇夜にご用心

半乾燥地ルーク、現在12万人の人々が住んでいるが、住人は人だけではない。無数の鳥や昆虫、動物も棲んでいる。私は、ルークでの長い生活で数々の動物とのハプニングに出くわした。

私たちは、ムンドルという泥と木の枝でできた円形の現地の家に住んでいる。個室のはずなのに同居人がときどきいる。サソリとキャメルスパイダー(毒ぐも)である。へやの角のタンスの後ろや服を脱ぎ捨てるとその下にいる。朝起きて、靴の中に直接足を入れてはいけない。ある日、私はくつをはこうとして、ひもをほどくために手にもつと、中からポロッと土間へ何かが落ちた。よく見ると、体長5cmもあるサソリ。「ゾゾゾ……」ソマリアのサソリは致命傷になることはないが、2~3日、痛みと発熱で苦しむ。ソマリア人のメイドさんが一度こいつに刺されたことがあった。サソリが背中をはっているのに気づかず、「何だろう」と背中に手を巡らせたとたんチクリ。二日ほど「ゼイゼイ」言って苦しんでいた。

またいやな奴がキャメルスパイダーだ。壁や天井を這っている。私たちのメンバー樫田氏は、一度こいつにうでをかまれて苦しんでいた。恐いのは、夜中。部屋の中はまっ暗。お腹の上がモゾモゾしても決してさわってはいけない。サソリか、キャメルスパイダーか。さてきて、見えないし、気になるし、人間の想像力は逞しく良からぬことばかり考える。

みつ蜂騒動

ある日、私は、みつ蜂の大群に出くわした。どうも分家らしい。と見ていると、なんと私の家にぞくぞくと入っていく。私の家は、小べやがついていて、そこに砂糖や他の食糧がいっぱい入っていたが、これが目当てか。理由はさっぱりわからない。

「コラー、主人に断わりもなく、人の家を占拠するな」と叫ぶが、聞く耳持たず、馬耳東風。どんどん中へ入っていく。蚊取線香をたいて追い出そうと思ったが、無駄骨。おたおたする私を見たソマリア

人は笑いながら、枯葉を集め、果敢に家の中へ飛び込んで部屋のまん中でたき火を始めた。煙で、みつ蜂をいぶり出すつもりらしい。効果てき面、みつ蜂が去っていく。「あれ、いかん、注意していないと家が全焼してしまう」私も家に入り、あわてて、ふとんや本などをわきへかたづけ。恐怖で手を振りまわしたためか、腕に2カ所刺された。約一時間の騒動後、一件落着。家主の勝利に終わった。

猿とたばこ

「ダニエル！」(ソマリア語で猿の意)またソマリア人のメイドさんハビボが猿を追っかけている。せっかく料理したスパゲティをぶっちゃけられ、切ったパイナップルを盗まれた。逃げる猿、大きなおしりをふりふり追っかけるハビボ。その姿を見て「ハッハッハッ」なんて笑えない。私の昼食をやられたのだ。パッキャロー、足もとにあった石を拾って、私も後を追う。飼っていた猿とのお話です。

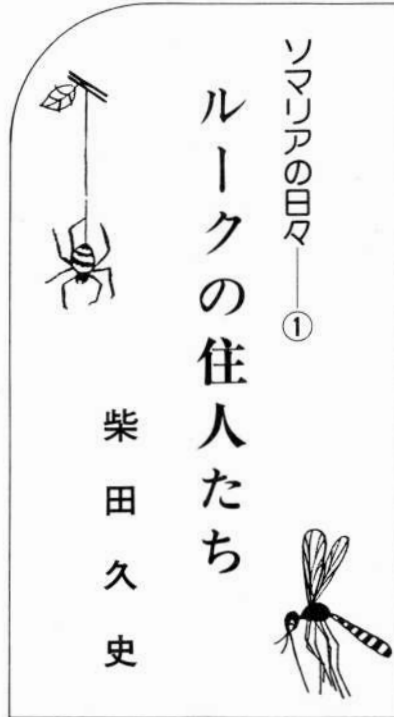
数日後、なんと私の部屋にあった1カートンのタバコを猿が持ち出して逃走。このときは、さすがの私も怒り心頭。ここでは、タバコは1箱1500円、10箱で1万5000円もする。私もソマリア人もタバコがなくなると、落ちていくしけもくを吸うほどここでは貴重品だ。

私を先頭に5、6人のソマリア人が猿の後を追う。

「そっちへ行っただぞ」「アデン、こっちだ」石を拾ってぶつけるが、あまりに機敏で一つも当たらない。「コラー、ダニエル。お前は50シルで買ったのに、タバコは1500シルも出したんだぞ。早く放せ、コンニャロー」遊ぶ猿、怒る柴田、おもしろ半分私に協力する数名のソマリア人。その外側に座ってこの光景を見て爆笑する大勢のソマリア人たち。1カートンの私のタバコが返ってきたときには半カートンになっていた。猿の奴、おもしろ半分中を開けてひっかきまわしてくれた。

「コンニャロー、ダニエルめ。こんどやったら脳みそを食ってやる」

こうしてルークの日々は過ぎていくのであります。



JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員
 - （一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 - 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円
- ・賛助会員 金品による支援（金額は自由です。）

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
（住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。）

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただきます。

- A. アフリカ難民救援募金（12月小計 214,230円）アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金（12月小計 24,000円）タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金（12月小計 373,019円）カンブチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金（12月小計 20,000円）バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. デッグ・スラム奨学金・基金（12月小計 122,690円）バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金（12月小計 17,100円）定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金（12月小計 32,000円）緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金（12月小計 15,000円）現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC 運営経費募金（12月小計 40,000円）現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金（12月小計 872,400円）

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495（募金種目名をご記入下さい。）
加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶社会主義になったエチオピアだが、相変わらず男女の差がはっきりしている。今でも“男子厨房に入らず”は厳格に守られ、よほどの例外を除けば家庭で男たちが料理することはないらしい。女たちは料理や育児のほかにも畑仕事、薪集め、水汲みと力仕事も一手に引き受けている。その上に女は美しくあらねばならないとは。

働き者で美しくエレガントなエチオピア女性は、中性化した日本女性を見慣れていた日本の男たちにとって天使と映るらしい。何組かのカップルも生まれている。しかし数年たつと女たちは強くなり出し、かかあ天下となってしまう。やはりどこも変わらない、か。



昭和62年1月20日発行（毎月20日発行）

編集人 前川 昌代

発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター（JVC）東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND
29/3 Soi Sangchan, Sukhumvit40,
Rama 4 Road, Bangkok 10110.
☎391-1117

Telex:87032 COMSERV TH
ソマリア事務所 JVC SOMALIA
c/o UNHCR P.O. Box 2925
Magadishu,
Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア事務所 JVC ETHIOPIA
P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア事務所 JVC KAMPUCHEA
203 Monorom Hotel Phnom Penh
Letter :c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
Bangkok.

印刷所（株）ベスト・プリンティング

＊本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 300円

Trial & Error (試行錯誤トライアル・アンド・エラー) 第66号

発行日 昭和62年1月20日発行(毎月20日発行)通巻66号

昭和57年9月16日第三種郵便物認可

